

特集にあたって

八巻 直一

日本のORの歴史は、戦後の占領政策によって始まったといわれています。しかし、我が国の製造産業が、復興期をたちまちクリアし、飛躍的に成長した要因としては、やはり占領下にアメリカから上陸した、統計的品質管理の浸透によるところが大きいといわざるを得ません。品質管理技法がIEの領分であったことから、その後ORはさほど重要視されず、IEが産業にもたらした功績のみが注目されたのは、ORワーカーにとっては残念な経緯ではあります。

それはともかく、統計的品質管理は製造産業に十分に浸透し、今では製造管理の基本的な常識となりました。コンピュータが身近でなかった頃から、統計計算は、生産管理の現場では日常的に行われていました。したがって、コンピュータの登場以来、多分もっともポピュラーなプログラムの一分野として、統計計算が挙げられましょう。

歴史的に見ても、数学の応用として統計はもっとも古いものの一つでしょう。我が国でも、律令制以前の昔から始まり、秀吉の時代における検地刀狩りなど、ときの政府の政策には、おそらく数学の専門家が統計知識を駆使して活躍したに違いありません。

コンピュータの普及とともに、平均値などの基本的な計算のプログラムは、あらゆる言語でそれこそ無数につくられたでしょう。しかし、不思議なことに、パッケージとして市場で競争するプログラムは、ものすごく多いわけではないのです。

本号の特集では、現在おそらくもっとも利用者の多いパッケージの、ランキング上位のものを取りあげました。それらは、以下のとおりです。

- S-Plus (Statistical Science Inc.)
- SAS (SAS Institute Inc.)
- SPSS (SPSS Inc.)

その他にも、いくつかの重要なパッケージは数えられますが、ユーザの多さという点で上の三つは圧倒的でしょう。これらのパッケージはいわゆる本格もので、ほとんどあらゆる統計計算に対応しているばかりでなく、大きなシステムに組み込まれて運用されることも考えられています。したがって、コンセプトの違いや使い勝手の違いこそあれ、機能的にはほとんど同じといってい良いでしょう。しかし、それぞれの特長には違いがあります。これから統計パッケージの導入を計画するためには、その微妙な違いが重要でしょう。本特集では、充分に使いこなした上での評価が列記されているので、読者諸兄にとって、貴重な情報となると信じます。

その他、ここでは触れませんでした。教育用のパッケージのように特殊な用途に限定したものや、表計算ソフトウェアに対するアドインソフトウェアなど、一般ユーザに広く受け入れられることを目的としたものなどが挙げられましょう。

今回の特集では、まったく異なる現場で、日常的に本格的な活用をしている事例を紹介していただきました。おそらく、統計パッケージが、最大限に活用されている事例に数えられるのだらうと思われます。

ORというと、最適化問題を解くことが本流のように考えられがちですが、実社会では統計的データ解析が重要であり、データに十分語らせることこそが、最適方策に正しく接近する基本であることを知らされました。

なお、これらの論文は、ORソフトウェア研究部会において、講演していただいた内容です。

やまき なおかず システム計画研究所
〒150 渋谷区桜丘町2-9 カサヤビル